

最新更新分へジャンプ

「雨の方は大丈夫みたいなんで。ええ……はいはい。じゃ、その通りに」

一晩明けのうちに、雨はすっかり上がっていた。

いつもの黒い空を背にして、いつもの調子で電話を終えたムロビシは、いつもの書齋にひとりきり。くたびれたソファから起き上がったのは、さして前の時間ではない。コンピュータの人工光が、暗がりの世界に馴染んだ目に痛々しく飛び込んでくるのが煩わしく、視線を逸らすように心がけながら受話器を戻す。

腕を頭上に上げ、体を伸ばす。肘や肩、背中といった、ありとあらゆる関節が情けなく乾いた音を立てて鳴る。体中が痛い。そろそろあの質の悪いソファで眠るのは堪らない……そう考えるようになってから、もう一年近く経つのではないだろうか。

買い換える金はない。増え続ける廃墟から拾ったとしても、存分に体を伸ばして眠れるような大きさの家具を運ぶ手段もなく、泣く泣く現状を維持するしかない。

床にマット材を敷き詰めて眠る方法も試そうとした。地道に寄せ集めれば容易に叶いそうだなと思った。それも実行に至らなかった原因は、偏ひとへに雨毒うどくにある。

雨毒は降り注いで数秒で透明度を取り戻し、ただの雨水へと変化するが、毒性が完全に失われるわけではなく、ごく微量な効果を持ったまま乾燥した物質が沈殿、蓄積すると推測されている。それを知つていながら毎晩地べたで眠れるほど、ムロビシは人生を諦められていなかった。文句は絶えないが、こればかりは長い物に巻かれる以外ない。

不毛な回想に耽る怠惰と共にストレッチを終え、机上に置かれた細身の白いリボンを静かに持ち上げる。回転式の椅子を半周くると動かして、窓の外に広がる恒常と化した悪天を背景に、リボンの片端を摘んだまま、もう片側を離す。

縦一本に垂れるそれは、さながら、ヨサメを模しているようである。

昨日、雨毒の降る中、なんとか無事に帰宅した後、朝のうち話していた通り、保留していた恒例の簡易検査を行った。最後に血液採取を終え、注射創を押さえるキナリから受け取ったのが、この白いリボンであった。

『ロットラントで買った。ムロビシにあげる』

『何に使う物だろう？』

『……髪に』

『へえ———ありがとう。上手く結べるかなあ』

ムロビシにとつて、キナリのその行動は予想外だった。そのあとすぐにカラスの元へ寄つて、赤いヘアピンで前髪を留めてやっているのを見るに、どうやら彼にもプレゼントを買つて渡してあげたらしい。カラス本人は面倒くさそうに嫌がつているが、なるほど、やはりキナリは心優しい子だと感心する。

（俺は不器用だから……）

宙に垂らして眺めていたリボンを、無骨な大きな手で掴み直し、後ろ手に回して、すでに髪

を結っているへアゴムの上から、白いリボンで蝶々結びを描く。このリボンだけで髪を結うには手間と慣れが必要だが、せっかくもらった心遣いなのだし、せめてこうして飾りとして使つてやるべきだろうと思つた。

「さて——行きますか」

上手く結わけているのか、自分で確認できるような洒落た道具はないが、どうせ誰が注視するようなものでもない。取り分け気にかけることもなく、事前に用意してあつたくたびれた靴を小脇に抱えて書齋を出る。底冷えする廊下を左——カラスとキナリのいる、星霜匣デイトンフルが置かれた部屋の方を向くと、アカアリが所定の位置にぼうつと立って、窓ガラスから外を眺めていた。

足も腕も痛々しい皮下出血の痕が残っているが、ひとまず自力で歩行することはできるらしい。至る箇所が破けてしまった服はあまりにも不埒で、さすがにどこかで買い直してやるべきかと唸りながら、廊下を進む。

すれ違いざま、アカアリの首元にたつぷり設けられたファーに、見慣れない物体が附着しているのに気づく。

青いブローチ。幾何学的なデザインで、それなりにしっかりとしたつくりのようだ。これも恐らくキナリが買い与えた物だろう。どこで何をするか予測しづらいアカアリでも引つ張つたりして落としづらそうな位置を選択して、宥めながらつけてやったのだと思えば、随分な成長

である。普段アカアリの様子を観察しているキナリならではの結論で、直情的なカラスには到底真似できない。

ムロビシの考察の間も、アカアリは眼球すら動かすことなく、窓の外を静観している。そこから見えるものと言えば、雨毒により豊かさを失った荒野と、その先に聳えるヨサメくらいなものだろう。

「お前もヨサメがお気に入りか」

アカアリが本当は何を見ているのか分かったものではないが、そう声をかける。もちろん、返答はない。

「しかし……前々から疑問だったんだが、そのピアスと髪留め、自分で拾ってきたのか？」

「……………」

「拾うだけならまだしも——そんなわけないよな」

独りでに続く問いかけに、さすがのアカアリも脇目にムロビシを見る。ムロビシはヨサメを視線に捕らえながら、右手で数回、頭を搔いて眩く。

「性が悪い輩だね」

うつすらと嘲笑を浮かべ、再び少年少女の元へと歩み出す。その姿を追うようにアカアリは首を回すが、すぐに何事もなかったように窓ガラスへと視線を戻し、じつと眺望へと意識を戻した。

アカアリの所在から数歩進んだところで、厚い掌を丸め、壁をノックする。

「おふたり。起きてるかな？」

返事を待たずして部屋を覗き込むと、相変わらず勉強に勤しむキナリと、何をするでもなく仰向けに寝転がるカラスの姿があった。

「……ヒマ」

カラスがぼそりと呟く。

「昼寝でもできりやいいのにね」

ムロビシは笑って言うのと、カラスは片足を上げて、その親指で星霜匣を指し示す。

「ちよつと前に、その汁から出てきたばっかだつつの」

「汗つて。水とか液体くらい言いなさい」

「一緒だろが。そもそも、その『寝る』って感覚が分かんねーわ」

「ううん。方法を覚えるような現象じゃないだけに、説明がしづらいね」

入口近くに置かれた、星霜匣の維持装置のひとつに腰掛ける。

「それこそおいちゃん、廻ねど人が睡眠を欲さないっていうのも、君らの生活ぶりで初めて知ったくらいだし」

「ふーん。もつかい星霜匣潜つとくかな……。アカアリ、怪我してつから、いつもみたいに寄つてこねーんだよ」

「へえ……」

アカアリが手負いのうちに殴りかかって勝とうとは思わないのか、とムロビシは密かに思う。「アカアリは眠ることはしても、『痛み』はないらしい。カラスくとやり合うのを避けてるんだとしたら、痛いからじゃなく、動きづらいからだとは思うけど」

「んなのはどっちでもいいわ。とにかく、ヒマ！」

当てつけのように言い捨てて、床をごろごろ。その床も冷たいだろうに……と哀れむムロビシは、カラスの前髪が赤いヘアピンでちゃっかり留められていることに気づき、噴き出しそうになるのを堪える。文句を言いながらも嬉しかったのか、はたまた前髪が視界に入るのが邪魔で仕方がなかったのか。理由はどうであれ、彼が存外素直にプレゼントに応じることも、ムロビシにとっては意外であった。

「ほら、これからイベントがあるから元気出しながら。昨日話したとおり、早速推進派の連中が来ることになった」

ほんの一瞬、キナリの字を書く手が止まる。

「結構前に出発したって連絡は来てるから、もう少ししたら着くと思う。で、やつらが到着次第、おいちゃんはお話のしに出掛けることになってる」

「そいつら相手に何すりゃいいんだよ」

「何するって……君らの健康診断のために来るって話したよね？ いきなり殴りかかったりし

ないですよ？」

「約束できねーわ。体鈍ってるし」

「やれやれ、困った子ばかりだな……」

落胆するムロビシのぼやきを聞いて、キナリは自分も面倒くさがられているらしいことを知りムツとするが、どこからか聞き慣れない爆音が鳴り響いてきたことで、そんな不満は瞬く間にかき消された。ムロビシが立ち上がり、「クラクシヨンだ」と教えてくれる。

「良かったね、カラスくん。早々に暇が潰せそうで」

噂の来客のようだ。カラスはガレージの方面へ向かうムロビシを見ると、先程までのだらけた態度は嘘だったかのように軽やかに起きあがり、ポケットに手を突っ込んだまま後についていく。キナリも、ゆったりと深呼吸してから席を立つ。アカアリはそんな三人の姿を見送るだけに留まり、その場から動くことはしなかった。

ガレージに出、一旦車内に潜ったムロビシが、シャッターを遠隔操作で開ける。低音を轟かせて内側が開ききつてから数秒明けて外側も開き始める。一枚だけでは雨毒の進入を防げないと、ロットラントへ行く前にムロビシが説明していたなあと、キナリは遠い昔のように思い出す。

二重構造のシャッターの先、見たこともないような大きな車が姿を現した。巨大なヘッドライトがコテージを煌々と照らす。外側のシャッターが完全に開ききつた頃合いを見計らって、

運転席からひよろつと細長い男が降りてきて、朗らかな表情で会釈をした。

||||| 最新ココカラ |||||

身長はムロビシよりもう一段大きいようだが、かなりの痩身のため、嵩に掛かる印象はない。その華奢さはキナリにも負けず劣らずといった具合で、着ている服が身丈の割に余って見えるのもそのせいだろう。

灰色の髪は、毛質の柔らかさが見て取れるほど重力に逆らうように立っており、その裾だけがほかより少し長い。実に手触りが良さそうな豊かさだ。切れ長の目に埋まる瞳の色は深い朱反して、身にまとっている服は上下ともに臙脂色で揃えており、それらを半分ほど隠すような白衣に袖を通してある。ムロビシとは随分と異なる衣服に、早速キナリの好奇心が向く。

「お久しぶりです、ムロビシさん」

ひ弱そうな外見に似つかわれない、たつぷりとした低い声で投げられた男の挨拶に、ムロビシは親しげに返す。

「どうも。しばらく振りだけど、トイトくん、また寔やっれた？」

「かも知れないですね……。連日連夜、地獄を間近に眺めてますんで」

トイトと呼ばれた長身の男は、萎れそうな空笑いを立ててムロビシの前まで歩み寄るのだが、その步調はどことなくおかしい。カラスとキナリでもすぐに気づくほどの違和感を、透かさずムロビシが問いかける。

「足でも痛めたんかい」

「ははは……。疲労骨折だそうです。治りかけですけどね」

「君の担当、そんな重労働だっけ？」

「いえいえ。日照不良、栄養失調、睡眠障害……諸々のヤツです。軽傷なのに全治五ヶ月だって。困っちゃいます」

世間話と共に、軽く握手を交わす。

「つくづく雨には参るね。それにしても、その足で運転してきたわけ？」

「ええ。ラヤンに任せるには、僕の肝っ玉が及ばないもので」

「ああ……賢明だ」

カラスは二人の会話を部分部分聞き取りつつも、あまり意味のある内容ではない気がして、呆れたように溜息をつく。まだしばらく無為な時間は続きそうだ。ガレージの一角に積まれた車のスペアタイヤに腰掛ける。一方のキナリは、トイトの挙動を舐め回すように観察していた。一切を見逃してなるものかという気概が瞳に宿っている。

トイトの肩越しに車をちらりと覗いて、ムロビシが続ける。

「そのお抱え問題児の様子はどうだい」

「こんな待つても降りて来ないところを見てもらえば分かる通り、相変わらず。もう一度躡け直していただいては？」

「勘弁してくれ」

からかうようなトイトの一言に、ムロビシは珍しく心底渋い表情を浮かべ、首を左右に小さく振る。そんなムロビシの困惑を大層満足げに眺めたトイトは、後ろに停めた車を振り返り、助手席に向けて手を招いた。男二人の話から察するところ、まだ車内に誰か居るようだが、ヘツドライトが邪魔をして全く姿を捉えられない。

妙な間が場に流れてから数秒経つと、根負けしたのか、小さな人影が大型車の助手席から身軽に降りてきた。爪先立ちで覗き込んでいたカラスの目にも、ようやく全貌が映り込む。キナリも追って確認する。

人影の正体は、女と思しき人間。トイトと呼ばれた男と同様の白衣を身につけているが、そのほかの奇抜な容姿には、普段口の滑るカラスが言葉を失うほどであった。

目にも鮮やかな明るい青い髪は、前髪だけが短く刈られ、長い両鬢りょうびんの先端だけ結ばれている。吊り上がった赤目と、首元に巻かれた薄手の布の隙間から見え隠れする、黒い絵のような模様が放つ威圧感たるや凄まじい。腹と腿を露出するような服も目を引くが、胸部の起伏は少なく、性別の判断を迷う一因を担っている。

「ほら、挨拶」

トイトに促され、悪魔のような風貌の女は、僅かに会釈をして、口を開く。

「……お久しぶりです」

非常に聞き取りづらい小さな声。決して弱々しいわけではなく、わざと吃どもっているかのよう。大仰に肩を竦めるトイトに唆され、ムロビシが仕方なしに女へ声をかける。

「——普段の暴悪っぷり、俺にも人伝に届いてるぞ」

「光荣です。感化されたまま抜けやしませんので」

先程の囁きのような喋りとは打って変わって、女が他に物言わせぬ早口でまくし立てる。どうやら二人は知り合いであるらしいが、親しいわけではないのか、互いが売り言葉に買い言葉だと、キナリはそつと思う。

ムロビシは調子を乱すこともせず、淡々と続ける。

「そろそろ相手を選んで慎む手段も覚えた方がいいんじゃないか」

「どの口が言いますか。お互い様でしょう。本部じゃあなたもいろいろ言われてますよ」

「なるほど……光荣だね」

頗る機嫌すこぶを損ねた女に、ムロビシはそれ以上の言葉をかけることは諦め、わざとらしくトイトを真似て肩を竦めてみせる。

「こんなもんでいいかい」

やはり満足そうなトイトが綻ぶ。

「お手上げですね」

懐かしい面々との挨拶が終わったのか、ムロビシがカラスとキナリを振り返る。カラスの顔面には、あまりにも回りくどく分かりづらい三人のやり取りから置き去りにされた不満が浮き彫りになっているが、それを弄ぶ気分ではないのか、ムロビシから簡潔な紹介がなされる。

「この二人が、例の推進派の一員だ。小さい方がラヤン。大きい方が——」

「トイトです。よろしく」

カラスの内心を悟ったのか、トイトは紹介を食い気味に遮り、手を差し出す。握手を求める動作だ。先のムロビシとトイトのやり取りを思い返しながら、その手を素直に握り返すべきか否かを悩むカラスの脳裏に、突如、奇怪な光景が閃光のように瞬いた。

目の眩むような明るい空間。眼前に迫る大きな掌。そこに張りつくのは、無数に蠢く小さな物体——。

「——触んなッ!!」

引き攣り声を上げ、トイトの掌を平手で弾く。いつになく突飛なカラスの行動に驚き強ばるキナリ。咄嗟に身構えるラヤン。ムロビシは……座視に留まる。

目を白黒させるトイトへと意識が向き直ると、カラスはハツとして歯を食い縛る。

今見た光景は、一体——。

言い表すことのできない物恐ろしさを孕む、記憶にない場景だった。脈絡のない幻覚の明滅に狼狽え、間近に体が反射してしまったことだけは弁える。

「悪いね、トイトくん」

自身に何が起こったのか、思考の整理に忙しいカラスよりも先に一声上げたのは、最も騒ぎに関与しないでいたムロビシだった。

「その子、特別小心者なんだ」

日頃のカラスが聞けば逆上するような物言いだ、それが緊迫した空気を些か解す巧言を担った。

「……うっせー」

ともかく、カラスがいつもの調子で悪態をつくだけで場の混乱はある程度収まった。トイトも平手打ちを食らった手をさすりながら、納得したように「なるほど、なるほど」と呟く。

「驚かせてしまったみたいで、申し訳ない」

「……」

「今日は二人にいくつか問診を……いや、失礼。そうだな、もつと端的に言う……今後の二人の待遇を決めるためにも、事前に聞きておきたいことがいろいろあるんです。協力してもらえると非常にありがたいんですけど、どうでしょう？」

言葉を選びすぎりながら説明して、改めてトイトが握手を求める。すぐに応えようとしな

カラスと、やや離れて様子を見守るキナリを交互に向くようにして、どちらかが口を開くのを待つトイト。その喧しい動きをじつと眺めてから、ようやくカラスの口から一言が放たれた。

「イヤだつたつたつて、どうせ帰らねーんだろ」

「……おや」

捨て鉢な物言いを受けたトイトは、途端に感情を削ぎ落とし、ムロビシを振り向き一瞥する。ラヤンも黙ったままだが、同じようにムロビシに向けて睨みを利かす。二人の焦点に合ったムロビシは、ゆつくりと息を吐く。

「……悪いけど、不躰な部分はフォロー願うよ。俺一人じゃ手の回らないことも多いんでね」

何かを察した様子の子のトイトは、特に言及することもなく頷いた。カラスとキナリにはさつぱり分からないやりとりが、どうやら双方の間で完結したらしい。

「合点です。それじゃ、定例通りに」

「はいはい。商談入れてあるんで、エントルまで出ますわ」

「夕刻までには終わりますんで……あつ。すぐ車退かします」

わたわたと動き始めた男二人を見、結局挨拶らしいことをせずに終わってしまったことを、カラスは僅かばかり気にかけて不貞腐れる。

事前に段取りを決めていた通り、用事を済ませるため車に乗り込もうとするムロビシに、ふとトイトが調子を戻して問いかけた。

「車……やばくないですか？ ボンネット拉ひしゃげてますけど」

「ちよつとやらかしてね。昨日はちちゃんと走つてたし、今日分くらいは働いてくれるでしょ」

「年代物はタフですねぇ」

「俺も肖あやりたいよ」

しげしげと半壊状態の車体を眺めて、何故か楽しそうに話す二人が、それぞれの車に乗り込み、慣れたハンドル捌はきで位置を移動させる。その一連の展開を残された三人が無言で眺める構図が短時間流れたが、不意にラヤンがカラスたちを向くと、その鋭い相貌を順に運んで光らせる。

「なんだよ」

彼女の人となりを知る機会はムロピシとの応酬けしでしか得られていない現状だが、カラスは相変わらず即行けし喚かける。双方が穏やかな人物ではないことを悟っているキナリにとっては、まだ少しの間、肝を冷やす時間が続くらしい。

投げられた煽動を拾うつもりがあるのかないのか、ラヤンが間も狭く口を開く。

「中に入れ、ガキ共」

「——はア？」

呼吸を感じさせない、独特の間を経て放たれたそれは、キナリが懸念していた場荒れよりも遙かに突拍子がなく、過激なものであった。当然、直情的なカラスが粗暴な言葉遣いに食つて

かかるのだが、ラヤンが怯むことはない。

「家主の不在により、お前等の管轄はボクたちへ移行された」

「だアから！ テメエもおっさんも説明ハシヨリ過ぎなんだよ！ 分かるように話せ！」

いつの日か振りの懐かしいやり取りの再現が、性懲りもなく繰り広げられる。キナリからしてみれば、随分と遠い昔の回顧に耽る気分だ。無論、初顔合わせのラヤンには不快な雑言ではない。

「……騒がしいぞ、クソガキ」

「黙れ、イカレ頭。オレは指図されんのが死ぬほど嫌いなんだよ」

右へ、左へ。カラスの重心が僅かに揺れる。アカアリとの組み手に挑む際によく見せる、踏み込む直前の彼の癖。毎日一緒に生活するキナリには見慣れた動作だった。殴りかかる気なだろう。自身の非力を誰よりも自覚しているキナリは、せめて呼び止めなくてはならないと判断し、息を吸い込もうとするのと、ほぼ同時。

「説明求めておいて『黙れ』かよ——」

舌を打ちながら、ラヤンが姿勢をぐんと低く取った。カラスの出方に気づいている様子で、何かしらしようと企てているようだ。

相手が迎え撃つ態勢に入ると、尚火がつくのがカラスという生き物だ。こうなつてしまうと、名を呼んだ程度では何の抑止力にも成り得やしない。カラスの服の裾を引っ張ろうと腕を伸ば

した瞬間、視界の端から暗転し、体の末端から一切の力が抜け落ちる。

眩暈——とかいう、体の不調の特徴に似ている。地面すらすり抜け、無限に沈んでいくような感覚に襲われるが、視力がすぐに回復したのを察知して顔を上げる。しかし、その先にあつたのは、見たこともない暗い壁。すぐ傍にいたはずのカラスとライヤンの姿も、視界には捕らえられない。体の沈下は止まらず、どこものとも知れない壁が急激に遠ざかっていく。

ここまで来てようやく、どうやら自分は仰向けになつていて、壁だと思ひ込んでいた物は天井であるらしいことを認知した。

つまり、このままでいれば、かなりの高さから、床に落ち、背中を打ち、大変な怪我を、負うのでは——？

惨劇を予測する思考がコマ送りで噴出する中、ぎゅつと目を閉じると、ガラガラという崩落音が耳を劈く。

痛みはない。ずつと感じていた落下の感覚も消えた。得体の知れない恐怖を胸にしなげらそつと目を開くと……力一杯伸ばした腕の先で、カラスが半月を描いて宙を舞っていた。

元の世界に戻ってきた。そう歓喜した瞬間に汗が噴き出し、カラスが背中から床に叩きつけられ、部屋の隅に積み上がる車の金属部品が飛び散って騒音を立てる。カラスの口から軋むような苦悶の息が漏れると、直にガレージはしんとした沈黙に支配された。

「情緒沸きすぎだろ、単細胞が」

つかんでいたカラスの腕を放り投げるように離して、ラヤンは立姿を取り直す。

「半不死身の新人類を相手取るのに、丸腰の研究者だけでこんなところ来るワケないだろ。ちよつとは思慮しろ、バーカ」

緩んだ首元の布切れを直しながら放たれるラヤンの罵詈雑言は、痛みに悶絶するカラスに届くはずもなかった。